

令和2年度学校評価結果報告書
(中間評価)



広島県立福山葦陽高等学校
(定時制課程)

目 次

1 自己評価結果

(1) 令和2年度自己評価シート（中間評価）・・・・・・・・・・ 2

(2) 令和2年度自己評価シート（中間評価まとめ）・・・・・・・・ 6

2 学校関係者評価結果

(1) 令和2年度学校関係者評価シート（中間評価）・・・・・・・・ 7

令和2年度自己評価シート（中間評価）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	田 玄 和 司	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	---------	--	---

学校経営目標					
	達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 考え抜く力の育成					
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	a) 定期考査における基礎力定着問題の通過率（国・数・英）	B	全学年平均値 国語 78.6% 数学 53.5% 英語 68.2%	教務部	
	b) 定期考査における活用問題の通過率（国・数・英）	B	全学年平均値 国語 59.3% 数学 36.3% 英語 61.1%		
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	c) 自己の将来を見据えた検定試験受験者数	C	・英語検定の受験者0名（1学期の校内実施中止） ・情報検定の受験者3名	教務部 進路指導部	
	d) 葦陽定時学びのスタイルの早期実現を目指し、学習と就労の両面から支援を工夫していく。低年次から担任・保護者・JST・公共職業安定所・就労支援機関等との連携を深めていく。また、面接指導を通して生徒の実態把握に努める。	B	・卒業予定者 21名の進路実現に向けて、職員の協力を得ながら、個別対応に力を入れている。 就職希望者 16名 進学希望者 5名 ・就労状況調査（9/10実施）就労率58.5% ※昨年同期比2.8%増 ・「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立へ向けての支援の充実を図っていく	進路指導部	

【評価結果の分析】

- a) 現時点で国語・英語はばらつきがあるものの、全学年でほぼ目標値を上回っている。数学は苦手とする生徒が多く、目標値を下回っているクラスもあるが、反復学習は基礎力の定着に一定の成果を見せており、生徒の集中力を高めることに役立っている。
- b) 活用問題は国・数・英だけでなく全教科で出題し、活用する力の定着の指標としている。国語・英語はほぼ目標値に達しているが、大幅に下回っている教科、クラスもある。今年度は臨時休業のため、各教科でシラバスを修正しながら基礎・基本、学び直しを優先して授業を進めており、現時点では活用力の向上に十分な成果が現れていない教科もある。
- c) コロナウィルス感染症の影響で今年度の初期指導が遅れ受験者数が伸びていない。1学期の英語検定試験については、受検を考えていた生徒もいたが、校内実施が中止となったこともあり受験者数が0となった。

d) 計画に沿って指導を進めるが、今年度は出願が例年より1ヶ月遅れで進んでいる。卒業予定者のうち、9月に高卒認定に合格した1名を含め21名(うち就職希望者16名)が出願に向けての準備中である。ハローワークを利用する予定の生徒のうち1名が確定していないが、その他の生徒についてはほぼ第1回目で出願できそうである。障害を持つ生徒の支援機関との連携も適宜行っており、今後も継続していく必要がある。就労率は5割を超えており、昨年度比で2.8%増の状況である。コロナ感染症によるアルバイトへの影響も大きい中でも健闘している。「葦陽定時学びのスタイル」確立の為、さらなる在学中の就労支援と学校への定着を図ることが必要である。就職指導支援員に面接指導を断続的に実施してもらうことで、生徒の社会性とコミュニケーション能力の育成にも取り組んでいる。

【今後の改善方策】

- a) 一定時間を取った漢字の書き取り、計算練習、英単語の復唱など反復学習、振り返りの取り組みが、基礎力の確実な定着につながり、生徒の集中力を高めている。引き続き反復学習、振り返りの取り組みを進める。併せて、授業規律を徹底し、落ち着いて学習できる環境づくりに努める。
- b) 学んだことをもとに自ら考えたことを表現する場面を授業の中で増やす。特に「書く」ことを中心に取り組んでいく。また、目標値に達することのできていない教科・クラスの課題として無答の生徒の固定化があり、無答率の高さが通過率の低さに直結している。問題に取り組む姿勢の涵養も必要である。
- c) 臨時休業が長期化し、英語検定は1学期の校内実施が中止となった。情報検定も2学期の校内実施の中止が決定している。今年度は見通しを立てて計画的に取り組みにくい状況であるが、英語検定については、3修制生徒、進学希望者を中心に年度内の受検を進める取り組みを行う。また、1年次の3修制希望者についても今年度中の英検の受験を勧め、必要に応じて放課後を活用した学習支援も開始する。また、就職希望者には個への取り組みと合わせて、授業・LHR・進路講演会などを利用して、情報検定のメリットを生徒に伝える機会を継続的に設ける。
- d) 卒業予定者の進路実現に向け、保護者の協力を得ながら、全教職員で個別対応に力を入れていく。また、「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立の実現に向け、個別面談等を繰り返し行うことでサポートをしていく。就労体験や授業成果発表などの取組をとおして全体の意識向上を図る。就労実態の把握とともに就労支援の取り組みを、関係機関との連携のもと行っていく。

2 前に踏み出す力の育成				
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	e) 自ら進んで毎日挨拶をすることができる生徒の割合	A	・挨拶向上実績度数は、目標値を7%上回った。	生徒指導部
	f) 前年度の問題行動の発生件数と比較した減少率	A	・問題行動の発生件数は前年度より49%減少している。	

【評価結果の分析】

- e) 「挨拶向上実績度数アンケート」において、「挨拶をしている」と答えた生徒の割合は97%であった。昨年度の実績度数は80%であり、挨拶をする生徒が増加していることが伺える。
- f) 前年度の問題行動発生件数は51件であり、今年度は、26件であった。49%減少している結果となった。前年度より登校日が減ったことも影響しているが、粘り強く指導を継続している成果も表れてきていると考える。しかし、特定の生徒が複数回指導を受けるケースがあった。

【今後の改善方策】

- e) 今後も、継続して挨拶ができるように指導していく必要がある。挨拶を苦手としている生徒に対しても、校舎内外で教員から積極的に挨拶をすることが効果的と考える。また、学校の教育活動全体で生徒に自信を持たせる指導も行っていきたい。
- f) 問題行動発生件数は、昨年度より減っているが、複数回指導を受けている生徒がいる。ルールを明確に伝え、継続して指導していく必要がある。その際、見える化などの工夫をし、生徒がよりルールを理解しやすいように配慮することによって、未然に問題行動を減らしていきたい。

3 チームで働く力の育成

4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	g) 学校行事に対する満足度（+生徒の具体的な変容）	B	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ大会に在籍生徒108名のうち、63名が参加した。アンケート回答者52名うち45名（86.5%）が「満足」と回答した。また、「普段話をしない人と話をするのができた」「最初は面倒だったが、クラス全員が参加したりレーなど楽しかった。」などの肯定的な感想が見られた。 ・生徒会執行部を中心に、司会や道具準備、パン・飲料の配付を生徒が主体となって行った。 	保健美化部
	h) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野が広がり、自己の成長につながったと感じる生徒の割合と生徒の感想に基づく生徒の変容	B	6月に総合的探究の時間「自然・文化コース」で「ばらのまち福山」について学ぶ講演会を実施した。	教務部 生徒指導部
	i) ボランティア活動等への参加率（校外清掃への参加を含む）	B	<ul style="list-style-type: none"> ・バラ祭りのボランティアに3名申し込んだが、イベント中止となり、参加できなかった。 ・毎月1回、LHR、考査前及び行事前に清掃活動を実施する。教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、久松台周辺の清掃、特別教室）の清掃にも取り組んでいる。清掃活動を通して、美化活動への関心を高めることや責任感、達成感、自己有用感を得られる場面を作っている。 	保健美化部 生徒指導部
	j) ペットボトル回収やゴミの分別を通して、環境意識が高まった割合	B	ゴミの分別方法を教室掲示し、ゴミ箱の設置場所、掲示を改善した。また、清掃活動時にペットボトル分別係を生徒に分担させ、プラごみ減量に関する意識改善を図っている。燃えるゴミ、プラスチックごみの分別が改善されている。	

【評価結果の分析】

g) スポーツ大会後に実施したアンケートでは、肯定的な回答が86.5%であった（昨年度86.8%）。感染症対策のため、準備期間が短く、保護者の参加同意を得るなどの対応もあり、参加者は限られていたが、中でも肯定的な回答が多く得られた。生徒会執行部は、準備、当日の運営も行い責任感を感じられる姿がみられた。また、クラスメイト同士で協力して競技する姿も見られた。スポーツを楽しみながら、他者と協働して課題に取り組む経験を積むができた。

h) 大勢で集まる場の設定が難しく中止になった行事もあり、外部講師を利用した講演会は1回のみとなった。しかし、「ばらのまち福山」としての復興の歴史やバラづくりについて学んだ生徒の感想はほぼ全員肯定的で、「福山を誇りに思う」「バラについてもっと知りたい」「他校に負けない1番のバラを作りたい」「バラの花壇づくりにむけバラを大切に育てたい」などの感想を述べている。

- i) ボランティア活動について、福山市のバラ祭りのボランティアに3名申し込んだが、イベント中止になり参加できなかった。しかし、呼びかけにより3名がボランティアに申し込んだことは、ボランティアへの関心がある生徒がいることが伺える。毎月1回、LHRでは、教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、特別教室）も割り振り、生徒全員が清掃に取り組めるようにしている。また、考査前だけでなく、日常的に教室内(生徒の私物)の整理整頓を呼びかけ、生徒の美化活動への関心・意欲の向上、主体的に美化活動に取り組めるよう働きかけている。トイレ掃除へ抵抗を示す生徒はおらず、掃除する生徒が増え、美化活動への意識や役割を果たそうとする姿勢がみられる。
- j) あらかじめ、分別したごみ（見本）をごみ箱に入れておく、分別方法をイラストで掲示するなど視覚で訴える工夫をしている。また、清掃時間にごみを分別したり、総合的な学習の時間等で、古紙でごみ袋を作成したりする体験を通して、ペットボトル・プラスチックごみの分別や減量についての関心が高まっている。教員からも、教室のごみ箱の分別や量が改善されているという声も聞かれる。

【今後の改善方策】

- g) 行事を通して、生徒同士が協力して取り組む経験を積むこと（学習）ができるように、感染症対策をとりながら、可能な限り行事を実施する。文化祭、その他行事の内容を、生徒会執行部を中心に生徒主体で作り上げるよう取り組む。
- h) コロナ感染症のため、学校行事等を実施しにくく、予定も立てにくい状況にある。しかし、普段の授業、教室の中では学習できないことを学べる場、社会的な視野を広げる場として学校行事は大きな意味を持つと考える。今後、可能な限りの対策を講じた上での外部講師や地域の施設を利用した「体験的な学び」の場を計画している。
- i) 特定の生徒が私物の整理整頓ができていない。個別に指導しながら、引き続き清掃活動を通して生徒の美化意識や自己有用感・ボランティア活動への関心、意欲を高めていく。また、ごみの分別等により、環境保護への意識や視野を徐々に広げられるような清掃活動の計画を立て実施していく。
- j) ごみの分別が改善されてきているが、燃えるゴミの中にペットボトルが入っていたり、プラスチックゴミの中に燃えるゴミが入っていることがある。各教室や廊下のごみ箱の状況を確認し、ゴミの出し方・分別・減量を実践できるように、授業、HR、掲示物等で引き続き指導を行う。

4 働き方改革				
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	k) 職員の勤務時間外の平均（月）	A	本年度目標値は月平均24時間としたが、8月段階での月平均が16時間と目標値をクリアしている。	校務運営会議
	l) 業務改善の取組について、学校全体で取り組んでいる（肯定的評価）	()	年度末の業務改善アンケートの結果をもって判断するため、評価は入っていない。	校務運営会議

【評価結果の分析】

- k) 日常的に管理職が退校を呼び掛けるようにしている。勤務時間管理システムをこまめにチェックしながら、在校時間が増えている教職員に対しては、意識的に声掛けを行っている。これらのことから、退校時間に対する意識化が図られているのではないかと考える。
- l) (年度末) 現状としては、教員間で業務の軽重は生じているが、協働的に業務に当たれるように取組を進めているところである。

【今後の改善方策】

- k) 引き続き、勤務時間管理システムのこまめな確認を行い、在校時間の縮減に向けた教職員の意識の向上を図る。また、定時退校日には、管理職が率先して退校を呼びかける。
- l) (年度末)

令和2年度自己評価シート(中間評価まとめ)

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	田玄 和司	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	-------	--	---

1 評価結果の分析と改善方策

■ 考え抜く力の育成

○基礎学力の定着と活用力の育成

- ・定期考査における基礎力定着問題について、国語と英語は全学年でほぼ目標値の65%を上回った。しかし数学を苦手とする生徒が多いこともあり、目標値を下回る結果となった。活用問題についても同様の傾向が見られる。全体としては、反復学習により基礎学力の定着が図られていると考える。
- ・本年度は、自分の考えを書いて表現させる考査問題づくりを目標にした。日々の授業においても、表現することを念頭においた発問等の取組を通して、正答ではなくても試行錯誤しながら記述する生徒の割合が、少しではあるが増えてきた。引き続き、この取組を継続するとともに、すべての教科にひろげていく。

○キャリア形成と学び続ける力の育成

- ・自己の将来につなげることを目標に、検定試験の受検者数を増やす取組を行った。しかし、目標値を大きく下回っているコロナウイルス感染症の影響もあり初期段階での指導が遅れたこともあると思われるが、検定試験がどのように自己の将来につながるのかといった、明確な動機付けが足りなかったのではないかと考える。まずは、個別の声掛けを重点的に行っていく必要があると考えている。
- ・現在、卒業予定者21名の進路実現に向けて取り組んでいる。うち16名が就職希望で、5名が進学希望者である。就職については、コロナウイルスの関係で今年度は就職の願が1か月遅れで進んでいるが、だいたいの生徒の方向性が決まり、出願に向けて面接指導とあわせて取り組んでいる。昨年度よりも早い進路指導を展開してきたが、十分な指導ができたとはいえないところがある。低学年時からの進路に対する目標や意識付けを系統的に行っていく必要がある。

■ 前に踏み出す力の育成

○他者との関わりを通した社会性の育成

- ・自ら進んで挨拶をしていると回答した生徒の割合は目標値を上回り高い数値を示した。相手から挨拶をされたら、挨拶を返すことのできる生徒は確かに増えつつある。しかし、自ら率先して気持ち良い挨拶ができる段階にまでは至っていない。生徒のモデルとして、校舎内外で教師から積極的に挨拶をする姿を見せていくことが必要であると考える。
- ・問題行動の発生件数は昨年度に比べて大きく減少した。全体としては、落ち着いてきている。ただし、同じ生徒が問題行動を繰り返す傾向がみられ、再発を防ぐ指導の在り方を工夫していく必要がある。しかし、携帯電話の指導に課題がある。教職員が連携しながら様々に取組を進めているが、イタチごっこの様相を呈してしまっている。息の長い取組が必要だと考えている。

■ チームで働く力の育成

○体験的な学びを通した協働性の育成

- ・本年度はコロナウイルス感染症の対応により多くの学校行事が中止または延期となっている。感染症対策をとった上で、7月にスポーツ大会を開催した。生徒108名のうち63名が参加し、9割近い生徒から「満足」という肯定的な回答を得た。体験的な学びが少ない定時制の生徒にとって、このような協働的な活動はとても貴重なものであることを改めて確認することができた。今後、必要な感染対策をとった上で、できるだけ行事等を実施していきたいと考えている。
- ・本年度から、ペットボトルの回収やゴミの分別に取り組んでいる。なかなか徹底はしないものの、ゴミの量は確実に減ってきている。環境美化意識を高めることで、社会性を育成する取組を継続してすすめていきたいと考える。

■ 働き方改革

○業務改善の取組

- ・時間外勤務時間の平均は昨年度と同じ24時間とした。8月段階での月平均は16時間で目標値に達している。しかし、行事等によっては、在校時間が増えている。勤務時間管理システムを丁寧にチェックしながら、在校時間の縮減に向けた教職員の意識を高めていきたい。また、教職員が協働的に業務に当たっていくことを大切にしながら、業務改善の取組につなげていきたい。

令和2年度学校関係者評価シート(中間評価)

令和2年 10月 20日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	田玄 和司	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	-------	--	---

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> 「葦陽定時の学びのスタイル」を教員が皆その大切さを共有して進めていく計画が見て取れる。今後は、基礎力定着テストなどをWEB上にあるコンテンツも活用して、生徒が意欲のわくものを工夫して欲しい。iPadを使うことになれば、さらに活用の範囲は広がると思う。 学校経営計画におけるミッション、ビジョン、環境分析を踏まえて、昼間定時制としての教育を推進するための具体的な目標、指標、計画が適切に設定され相互に関連付けられていた。 定期考査における基礎力及び活用問題の通過率を、英数国の3教科で全学年の平均値により評価しているが、問題の難易度や入学してきた生徒の学力の変化に左右されると思われる。よく練られた同程度の問題で、学年進行で通過率が上昇するかなどの比較が必要ではないか。
計画の進捗状況の評価の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> 取組の達成度が数値化されて示されているので進捗状況がよくわかり、適切に評価されていた。 基礎基本を学び直し、かつ、反復学習で学力を向上とあったので、今後も続けてもらいたい。 具体的なデータに基づき、年度末を見通し、中間評価時点での進捗状況が概ね適切に評価されていた。 問題行動の発生件数が減少したとはいえ、26件というのは非常に多いと感じる。しかし、この問題行動が学校の規則を守れなかったことなのか、社会的に許されない行為なのかで大きく異なると思う。減少しているということは、内容的に区別して比較してもよい時期になっているのではないか。
目標達成に向けた取組の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> スポーツ大会や文化祭などを実施する意味は大きい。多様な生徒たちがつながる場をつくるのが大切であり、修学旅行もぜひ実施してもらいたい。 取組に今後は外部の力を借りて、学習や就労の両面からの支援もしていくとのこと、将来のための資格の話などもしてもらえるとよいと思う。 年度末における目標達成につながる計画的で組織的な取組がなされており、中間評価時点での適切な内容だった。 評価Aがこの時点でできることは立派である。引き続き評価を上げるように頑張ってもらいたい。 英検受験者が0であるが、少しでも興味がある生徒に上位の級を取得させるという方法は、準2級ぐらいから大学入試に役立つが、それも一部であり、それ以外にはあまり使い道はないのではないだろうか。発想を変えて、英語の苦手な生徒に5級ぐらいから順次取らせて自信をつけさせるやり方もあるのではないか。もちろん費用がかかることなので、受験料の補助も考える必要があると思う。
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> 評価結果の分析を読むと取組がほぼ計画通りに行われ、結果の評価も適切なものだと考える。分析から今後の課題も見えてくるところである。 各項目の評価に対応し、取組結果等の具体に基づき綿密な分析がなされ、今後の改善方針につながる概ね適切な内容だった。 ごみの分別やごみ箱の工夫・イラストの掲示・清掃時間での指導・総合的な学習の時間での取組などを通して実践していることは大変評価できる。生徒たちが、ごみの分別を通して社会人マナーを学び、家庭・地域にとどまらず、街中で行動できる人間に成長してくれることを期待する。
今後の改善方針の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこと」を中心に取り組むのはなぜか？このことが中間評価の分析からみえてくるのだろうか？少しこのことがわかりにくいと思う。何よりも「書くこと」の大切さを教員が理解していなくてはならない。おそらく、「書くこと」で考えるようになると思う。その前に「問い」をもたなければ人間は考えようとはしない。そのあたりで、もやもやしたものがあるのかもしれない。 今後は試験への取組として「読解力」が必要になってくる。そのためにも、1年生のころからの計画が大切だと思う。 評価結果の分析に基づき、各項目に対応した改善方針が示され、概ね適切な内容だった。特に、新規の環境教育につて実践ができることは成果であり、年度末に向けたさらなる取組に期待する。 授業規律の徹底・落ち着いて学習できる環境づくりには、授業方法の改善が重要である。講義を聴くだけでなく、一緒に議論したり、考えたり、創造するという授業を目指して欲しい。
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に評価は具体的で適切である。今後の改善方針をより具体的なものにして進めて欲しい。 子供一人一人が目標に向けて力をつけていけるようにして欲しい。来年から一人一人にコンピューターが導入されるとのこと、更に学力向上ができるように生徒・先生・保護者で考えていけるとよい。 コロナ禍の中で、ウイルス対策に留意してスポーツ大会や文化祭など学年横断的な行事を実施でき、生徒の高い満足度が得られたことは成果である。 多様で課題の多い生徒たちに対して、様々に取り組まれていることは理解できる。今後も継続した地道な実践を期待する。 今年は計画通りにできないことも多いと思うが、行事を少しでも取り入れて欲しいと願っている。